

一般社団法人 日本接着歯学会  
設立趣旨書

日本接着歯学会は1983年（昭和58年）3月20日に発足した日本接着歯学研究会を前身として、1987年（昭和62年）4月25日の第5回学術講演会（京都）の総会で日本接着歯学会（Japan Society for Adhesive Dentistry）に改組された。接着歯学分野での学会設立は日本接着歯学会が世界初であった。研究会設立から今年（2014年）で31年目、3年後の2017年（平成29年）4月には学会設立30周年を迎えることになる。本学会は歯と人工材料を一体化する接着材を世界に先駆けて開発し、“歯の削りが少ない”、“痛くない”、“早い”、“きれい”な歯科治療を実現し、歯を守り、歯の長寿化をめざして人々の口腔の健康維持に貢献してきた。

接着歯学は日本が先駆的に開拓してきた分野であり、本学会が産学臨と協働して世界の接着歯学をリードしてきたことは国内外で高く評価されている。う蝕治療における Minimal Intervention Dentistry はう蝕学（Cariology）と接着歯学の集大成の上に成り立った概念である。また、矯正治療におけるダイレクトボンディング、欠損補綴における接着ブリッジ、ラミネートベニア修復、レジン支台築造、歯周治療における動揺歯固定、う蝕治療における接着修復、予防填塞、接着性根管充填など、接着歯学に基づく治療は今日の臨床において一般化している。まさに「接着歯学は歯科臨床を貫く」と言っても過言ではないであろう。最近では前・臼歯部接着ブリッジおよび小臼歯部のコンポジットレジン CAD/CAM 冠が保険導入され、さらに直接法コンポジットレジン冠の臨床応用が世界に先駆けて始まった。その背景にはわが国特有の金銀パラジウム合金の価格高騰が保険医療財政を圧迫していることがある。今後、セラミック材やコンポジットレジン材を使ったメタルフリー修復への流れは加速度的に進むものと予測される。それを支えるためには接着材料が不可欠である。また、超高齢社会にあつて歯の長寿化は国民の QOL に大きく関わることである。歯・歯列の保存と口腔機能の長期維持のために本学会の研究成果はますます意義のあるものになろう。

このように歯科医療の革新的発展に寄与してきた本学会はこれまで任意団体として活動してきた。しかし、長い歴史ある本学会が今後発展するためには、国から認められた団体として社会的な信用度と、その存在意義を高める必要がある。また、法人化によって専門医の認定、科研費助成事業の申請、委託事業・寄附金の受け入れなどが可能となる。日本学術会議も学術団体の法人化を勧奨している。また、日本歯科医学会に所属する専門分科会 21 団体のうち未だ法人化されていないのは本学会を含めて 4 団体（2014 年度現在）のみである。

以上のことから、学際領域の中心的な存在である日本接着歯学会が歯科医療の更なる発展をめざし、社会的責任を果たすために、任意団体から一般社団法人化することを総会において決議するものである。

平成 26 年 12 月 13 日  
日本接着歯学会  
会長 福島正義